

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：31307

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00198

研究課題名(和文)リチャード・ハミルトン研究：ニューカッスル時代を中心に

研究課題名(英文)Richard Hamilton's Words and Works as Seen in His Newcastle Period

研究代表者

吉村 典子 (YOSHIMURA, NORIKO)

宮城学院女子大学・学芸学部・教授

研究者番号：20347917

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：ハミルトンがニューカッスル大学で教職を得た1953年から、ロンドンと行き来しながら同地で過ごした約13年間を「ニューカッスル時代」と位置付け精査した結果、この後の展開の基盤となる要素が形成されていることが見出された。この時代の作品にはポップ・アートの先駆的作品とされるものが含まれるが、彼の関心はその表象のポップとしての意味よりも、表象を示すメディアを通しての知覚世界の開発にあった。特に、この後にも引き継がれることとなる「変容」と「転換」の思想と表現は、彼の「スタイル」を伴わない作品展開に主要な役割を果たすことになるが、結果的にそれが、彼独自のスタイルを生み出すことになることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、これまで等閑視されていたハミルトンのニューカッスル時代の意義と新知見を明示することができた。この頃彼は「ポップ・アーティスト」として着目されるようになり、しかしそのために、彼の芸術の真髄を見えにくくしているところがあったが、本研究により、彼が「ポップ」の意味よりも、メディアの知覚開発に重きをおいていることを明らかにでき、「変容」と「転換」という、のちの時代の作品分析の手掛かりとなる要素を見出すことができた。この点は、ハミルトンが自身の造形スタイルを排除しようとする意思とも繋がり、かつ、結果的に彼固有のスタイルの生成に繋がるという彼特有のパラドクスの一側面をも示しうるものとなった。

研究成果の概要(英文)：Richard Hamilton's 'Newcastle Period' (1953-1966) proved to form the foundations of his later developments. His works of that time include what is considered to be the pioneering work of "Pop Art". However, his interest was not so much in the meaning of the representation of his art as "pop", but rather in the development of the perceptual world through the media he used. In particular, his ideas and expressions of "transformation" and "transition" are positioned to become extremely important elements of his later work. In fact, he will use them for the rest of his life. Using those elements, he tries not to establish his "style" as a visual expression. However, paradoxically, in so doing, he ends up creating his own individual style.

研究分野：美学・美術史

キーワード：リチャード・ハミルトン ニューカッスル メディア 写真 版画 ベーシック・デザイン

### 1. 研究開始当初の背景

リチャード・ハミルトンといえば、ポップ・アートの先駆的存在の一人として知られ、先行研究もポップとの関連において無数にある。ハミルトンは、2011年に89年の生涯を閉じ、2022年には生誕100年を迎える。「ポップ」に留まらない多様な表現活動の全貌を明らかにする時期が来ている。海外ではハミルトンについての各論がある中で、日本国内では存命中の展評等は散見されるも、ハミルトンの総論は見られず、海外でも未だ総論は僅かである。そうした現状のなか、筆者は、2017年よりイギリス美術研究の対象をハミルトンに絞り、調査に着手した。その過程で見えてきたことは、ポップの時代も、その前後も一貫して見られるハミルトンの追究は、二次元(タブロー)において「現実」を示す視覚世界の開拓にあるという点である。そこで構築された視覚世界とは何か。こうした学術的問いを研究の根幹に置き、作品および彼の思想の考察を進めることとした。

### 2. 研究の目的

ハミルトンの生涯の活動を概観する中で気づくことは、彼がニューカッスル大学(当時ダーラム大学キングズ・カレッジ)で教職を得た1953年から、ロンドンと行き来しながら同地で過ごした約13年間は、自身の表現の展開はもちろん、戦後美術全体を牽引する内容を孕み、重要な役割を果たしていることである。ハミルトンの手法の発端は、ニューカッスルでの様々な実験にあり、作品考察を深めるためにも、それらの詳細な調査を積み上げる必要がある。

一方、先行研究においては、同時代のICA(現代芸術研究所)やIG(インディペンデント・グループ)を通じてのハミルトンのロンドンでの活動に考察対象が置かれ、ニューカッスルにおける重要性が等閑視されている。しかし実際は、ハミルトン等が企画発表した著名な展覧会は、ニューカッスルで発表後、ロンドンで公開されている。ロンドンより着目すべき点は多数あるのである。

以上のことから、この時期を「ニューカッスル時代」とし、ハミルトン研究の中でも、重要な時期であると位置づけ、資料収集、整理、分析、考察を行い、未だ体系的な研究がなされていないこの時代の様相とハミルトンの成果を明らかにすることをねらいとした。

### 3. 研究の方法

ニューカッスル時代をさらに精査すると、次の3点において特筆すべき点が見出された。即ち(1)美術教育「ベーシック・デザイン」との関係、(2)大学付属のハットン・ギャラリーでの展示実験と現代美術家との交流、(3)大学に残されていた器材の修復と活用による自身の表現メディアの開拓、である。これらはロンドンでの彼の著名な活動に先行する内容を孕む。さらにニューカッスルでの活動の具体を挙げれば、戦後美術の重要な動きと重なり合う。この3点を手掛かりとして、関連資料や同時代の作品を所蔵する国内外の研究機関で、調査および関係者への取材を行うこととした。これら(1)(2)(3)を項目に立て、成果を次に記す。

### 4. 研究成果

#### (1) 美術教育「ベーシック・デザイン」との関係

美術教育史上で「ベーシック・デザイン」(Basic Design)と総称されるようになる英国戦後の美術・デザイン教育改革についての研究には、必ずやハミルトンの名が登場する。技術の習得を主とする伝統的な教育に対する1940年代末から見られる変革である。

ハミルトンと「ベーシック・デザイン」との関わりは、この改革を先導したニューカッスル大学とリーズ芸術大学(当時のリーズ・カレッジ・オヴ・アート)の前者に、彼が教員として在籍していたことにも因る。ハミルトンの他には、ニューカッスルでヴィクター・パスモア(Edwin John Victor Pasmore, 1908-1998)が、リーズではハリー・サフロン(Harry Thubron, 1915-1985)、トム・ハドソン(Tom Hudson, 1922-1997)が中心として挙げられる。

これらに係る研究は、「ベーシック・デザイン」が試みられた只中に上記機関で学んだ卒業生らによる調査に端を発する。彼らの研究公表は、1981年にロンドンで開催された「継続プロセス」(A Continuing Process)展にはじまり、同名で書物も出版された。これはリーズで学び、後に美術史家となったデイヴィッド・シスルウッド(Dr. David Thistlewood, 1944-1998)によるもので、それを先行研究とし、ニューカッスルでハミルトンの教授を受けたリチャード・ヨーマンス(Dr. Richard Yeomans)が博士論文(ロンドン大学)等へと発展させている。また彼らのほかにも卒業生による論考や記録等が公表されてきている。その後2013年からは英国全体を射程においた「ベーシック・デザイン」の研究事業が開始され、その成果は、国内美術館開催の展覧会やシンポジウム等で公表されている。

以上の研究では、「ベーシック・デザイン」の主要人物の一人として、ハミルトンを扱っているが、シンクレア(Peter Sinclair:研究半ばで急逝)と前掲のヨーマンス等が、ハミルトンに直接インタビューを行った際のテープおこし資料の全文、および、その他で記録されているハミルトンの言説を入手し、精査した結果、ハミルトンは、「改革」には積極的であったわけではなく、モダン・アートの思想を取り入れようとした戦後英国教育機関の動きがハミルトンを求めた

ことにあることが明らかになった。一方、ハミルトンは、この動きのなかで教育に携わるも、当時のモダン・アートの中心にあった抽象芸術（そのため当時は「ベーシック・デザイン」は「抽象芸術」の導入と言われるほどであった）もしくはそれ以外であっても、それらの「スタイル」を教えることには批判的であった。ハミルトンの作品および思想に既存の「スタイル」を思わせるものがあるとすれば、むしろそれは、彼が影響を受けたマルセル・デュシャンの「レディ・メイド」のような「既存」のスタイルとしてのそれであり、彼が、ニューカッスル大学勤務時代を回顧して頻繁に言及する「変容」と「転換」は、こうした「既存」のものからの「変容」と「転換」にあると言える。

ハミルトンは、この頃、「バウハウスの後継」と言われるウルム造形学校（Hochschule für Gestaltung Ulm, 1953-1968）の教員の招きで、同校を視察している。それ以降、同校の冊子や同校と共同事業を展開していた家電メーカー・ブラウン社のパンフレットが定期的にハミルトンのもとに届くようになる。その特に後者のヴィジュアル・デザインを自身の作品に用いているが、そこにおいても「変容」と「転換」が確認できる。さらにそのモチーフが、プロダクトであることが、先に言及した「二次元（タブロー）において『現実』を示す視覚世界の開拓」にさらに拍車をかける。所謂「平面作品」でありながら、「プロダクト」としての「機能」を持ちあわせ、その双方を「変容」と「転換」により行き来するような作品を展開していくのである。以降、晩年まで繰り返し制作されることになる《Toaster》（初作 1967 年）の他、同じくブラウン社の製品をモチーフにした《Still-life》（1965 年）《The Critic Laughs》（1968 年）の考察により、そのことが明らかになる。これらの思想は、ハミルトンが、「ベーシック・デザイン」の動きのなかで、学生に課した課題でもあり、自身の芸術における模索の過程を、この動きの中で読み取ることができる。従って、彼は、美術大学で芸術もしくはスタイルを教えたのではなく、また、「教育改革」という意識で教鞭を執ったわけではなかった。彼が自身の作品、つまりは、芸術に向かうなかでの問題自体を、教室で扱ったのであり、結果それが新たな芸術思想を醸成することとなったのである。

## （ 2 ）大学付属のハットン・ギャラリーでの展示実験と現代美術家との交流

ハミルトンは、大学着任後は付属のハットン・ギャラリーで、展示活動や展覧会を發展させている。加えて、国内外の重要な美術家の展覧会を企画運営している。フランシス・ピカビア（1964 年）の他、クルト・シュヴィッターズ（1965 年）と「メルツバウ」の壁画移動など多数ある。そして特筆すべきはマルセル・デュシャンである。実際、ハミルトンはデュシャンと接点を持つようになり、『グリーン・ボックス』の活字出版化（1960 年）そしてハットン・ギャラリーで《彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さえも》（通称《大ガラス》）の解釈と再現を行った（1966 年）。ロンドンのテート美術館で公表されたのは、この後のことである。この取り組みは、前項（ 1 ）で示した思想への影響のほか、特に晩年の作品に如実に反映されている。その作品分析は晩年期の研究課題とし、パンデミック後 2023 年 7 月に再開されることになった筆者のアメリカでの招聘研究で、アメリカにおけるハミルトンとデュシャンを扱うことにより、双方の関係についての研究を補強する。

一方、ハミルトンと接点のあった存命のアーティストへの取材課題は、COVID-19 により、国内調査にシフトしたことで、現在日本在住の塩見允枝子に向かうこととなった。塩見は 1965 年から 10 年間に合計 9 回の「イベント」を行っているが、そのうち塩見が日本から発した郵便による「イベント」にハミルトンは 5 回参加しており、その時のハミルトンの「レポート」（塩見の作品の一部を構成する）が塩見により保管され、閲覧することができた。いずれも、ハミルトンによくみられる機知に富んだ内容が確認できるが、なかでも第 2 回の「方向のイベント」の「レポート」においては、それだけには留まらない側面が、彼のニューカッスル時代と重ね合わせることでより見えてきた。ハミルトンは、ニューカッスルで教職を得てから自宅のあるロンドンとの約 400 km を鉄道で行き来していた。その車窓からの風景が、レポートの題材になっていることが見出されたことに加え、当時彼が、絵画面面に提示するための対象分析の手法を大学で模索し、その問題自体が「レポート」に投影されているのである。そのため、ニューカッスル時代に発表された作品《re Nude》、《Still Life?》、《Trainsition III》や《Trainsition IIII》で問題とした思想をもこの「レポート」から読み取ることができるのである。

また、この時代にハミルトンが関わった展示に“Man, Machine and Motion”（1955）や“An Exhibit”（1957）があるが、これはニューカッスルでまず展示され、その後ロンドンで開催されることになる。一方、ポップ・アートの先駆的な展示で知られるロンドンで開催された“ This is Tomorrow ”（1956）は、ロンドン開催のみであるが、この展示企画の多くがニューカッスルで準備され、そのことが後の作品展開に影響を与えていることが明らかになった。その点は、次項の「メディア」と大いに関係するところであるので、そこで詳述する。

## （ 3 ）大学に残されていた器材の修復と活用による自身の表現メディアの開拓

ハミルトンは、ニューカッスル大学赴任後、学内で長く使われていなかった版画および印刷全般に係る 施設や機材を整備・拡充している。彼は、1960 年代に入ると、絵筆を主として用いた作例は殆どなくなり、写真や版画というメディアを用いて、視覚世界の構築に取り組んでいる。こうした表現媒体の展開のはじまりがここニューカッスルにある。この後、晩年にいたるまで、写真や版画は、ハミルトンにとって中心となるメディアになるが、その初期実験の様相が、ニュ

ーカッスル時代の精査により明らかになった。

特筆すべきは、ロンドンで開催された前掲の“ This is Tomorrow ” (1956)展のために制作され、のちにハミルトンが世界的にも知られることにもなるコラージュ作品《いったい何が、今日の家庭をこれほどにも変え、魅力的なものにしているのか?》(以下、《いったい何が...》と表記)をもとに制作したポスターについてである。これは、ニューカッスルの機材を用いてハミルトン自身の手で制作されたものである。コラージュが、およそ2.5倍となってポスターに拡大単色印刷されることにより、コラージュされたマテリアルのメディアの違いがはっきりと表れ出す。マテリアルが印刷物の場合は、印刷メディアの特質である網目が表れ出し、一方、写真のメディアの場合は、図像の細部のかたちがそのまま拡大され、抽象的な形を生み出している。これがきっかけとなり、後の写真の「引伸ばし」(blowup)が展開したと言っても過言ではない。《People》(1965年)そして《Mother》(1968年)への道筋はそれを如実に表している。従って、特に《いったい何が...》については、これまで「ポップ・アート」の先駆的作品として、「ポップ」の表象的意味に目が向けられてきたが、むしろ、表象を示すメディアの視覚世界にハミルトン自身の意識が、この時代にすでに向けられていたと言えるのである。(1)で示した「変容」と「転換」もこの過程の一つとも位置付けられる。このことは、《いったい何が...》が掲載された展覧会図録のハミルトンの言葉、即ち「求められることは、表象の意味を明確にすることではなく、留まることなく豊かになる視覚世界を受け入れ、そして活用するために、我々の潜在的知覚能力を開発させることにある」に明確に示されている。

以上の3点からも、ニューカッスル時代の思想と制作の試みが、ハミルトンのこの後の展開の基盤をつくりあげていることが確認できる。そして何よりも、ハミルトンの関心がメディアとそれが生み出す知覚世界の開発にあり、そうであるからこそ、この後に登場するデジタルの世界にハミルトンの関心が及ぶのは自然のことであったと言えるであろう。ニューカッスル時代を対象とした研究成果を基盤に、デジタル世界への展開をこの後の課題としたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 吉村典子	4. 巻 71 (No.1)
2. 論文標題 リチャード・ハミルトンの《Lux 50 - functioning prototype》	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 美学	6. 最初と最後の頁 145-156
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Noriko Yoshimura	4. 巻 N/A
2. 論文標題 Richard Hamilton and LUX 50th Anniversary Project	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 LESSONS TO LEARN? Past Design Experiences and Contemporary Design Practices, Institute for the Research of the Avant-garde	6. 最初と最後の頁 307-316
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉村典子	4. 巻 49
2. 論文標題 塩見允枝子《空間的な詩》とリチャード・ハミルトン	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 宮城学院女子大学英文学会誌	6. 最初と最後の頁 23-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Noriko Yoshimura	4. 巻 -
2. 論文標題 Richard Hamilton 's Artwork: Based on Braun 's Electronic Products	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Other Designs: Practices and Peripheries	6. 最初と最後の頁 TBA
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 吉村典子
2. 発表標題 1956年「これが明日だ」展再考 - 「グループ2」の展示を中心に
3. 学会等名 美術史学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉村典子
2. 発表標題 ジョン・ヴェルカーの空間計画
3. 学会等名 意匠学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Noriko Yoshimura
2. 発表標題 Richard Hamilton and LUX 50th Anniversary Project
3. 学会等名 The 12th Conference in the International Committee for Design History and Design Studies (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 吉村典子
2. 発表標題 戦後英国美術におけるモリス解釈
3. 学会等名 意匠学会デザイン史分科会 / 第5回モリス研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 吉村典子
2. 発表標題 「これが明日だ」展の"Pop"と"Op" 戦後イギリスの展示文化
3. 学会等名 人文社会科学研究所 第28回公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 吉村典子
2. 発表標題 塩見允枝子《空間的な詩》におけるリチャード・ハミルトン - 「影のイベント」を中心に
3. 学会等名 美術史学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉村典子
2. 発表標題 リチャード・ハミルトンの《いったい何が、今日の家庭をこれほどにも変え、魅力的なものにしているのか?》のもう一つの意義 マテリアルのメディアに着目して
3. 学会等名 意匠学会全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Noriko Yoshimura
2. 発表標題 Richard Hamilton 's Artwork: Based on Braun ' s Electronic Products
3. 学会等名 International Conferences on Design History and Studies ( 国際学会 )
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------